

2024年7月28日

説教題「救いの右の手」イザヤ書 41 章 8～10 節

主任牧師 加藤 誠

「恐れることはない。わたしはあなたと共にいる神。たじろくな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け／わたしの救いの右の手であなたを支える」(イザヤ書41章10節)

イザヤ書 40 章～55 章は「第二イザヤ」と呼ばれていて、神さまご自身の「慰めと希望」の言葉が霊の息吹のように語られている箇所です。時代的にはバビロン捕囚の苦難の中にあり、疲れと失意に深く沈み、「なぜ自分はここにいるのか?」「なんのために生きているのか?」、自らの存在意義と生きる目的が分からなくなり、力を失っている人々に向けて神が語りかけておられる言葉がたくさん収められています。

2500 年も前の言葉でありながら、今の私たちの魂の奥底にも響く言葉が多いのです。分厚い聖書のちょうど真ん中あたりにあるので「聖書の中の聖書」と呼ぶ人もいます。わたし自身、この「第二イザヤ」を読むたびに神さまの霊の息吹を吹き入れられる思いになります。もし自分で聖書を読めなくなったら、わたしは「第二イザヤ」を枕元で読んで欲しいと思っています。なぜなら、私たち人間は、神の霊の息吹を受けて生きるように造られているからです。赤ん坊は語りかけられ、自分の名前を何百回、何千回と呼びかけられて生きる力を引き出されていきます。人は肉の糧だけでは決して成長できない。神の語られる命の言葉、霊的な言葉によって人は生きることができるのです。イザヤ 55 章「渇きを覚えている者は皆、水のもとに来るがよい。耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。聴き従って、魂に命を得よ」とある通り、わたし自身の言葉、人びとの言葉では生きることができない「渇きを知る者」として主の語られる霊の言葉を求めて生かされていきたいのです。

さて、そのイザヤ書 41 章 8～10 節を読みました。ここでイスラエルの人びとは「わたしの僕」「わたしの選んだ」「わたしの愛する友」と呼ばれています。イスラエルの人びとを深く愛し、その疲れや失意、戦いを覚えて寄り添い、明日に向かう使命に立ち上がらせていかれる神ご自身の語りかけです。どこかヨハネ福音書 15 章の主イエスの弟子たちの呼びかけと重なります。弟子たる者は主イエスに従う者です。イエス・キリストの信仰は、自分の喜びを追い求める信仰ではなく、主イエスの喜びを追い求めていく信仰であり、この世の人びとが語る幸いではなく、主イエスが教えてくださる幸いを学んでいく信仰です。ですから私たちは「主イエスの僕」なのです。「わたしの僕イスラエルよ」と語りかけられるのと同じように「わたしの僕カトウマコトよ」と呼びかけられている主に対して、「ハイ、主よ、あなたがわたしに求めておられることは何でしょうか?」と応える信仰をいただいきたいのです。

ただこの場合の「僕」は、主人の良いように使いまわされて、捨てられていくよう

な、人間社会における「僕」（奴隷）とはまったく異なります。なぜなら主なる神は「小さな僕である私たちの救い」のために全力で最善を尽くし、最後まで責任をもってくださる方だからです。9節「わたしはあなたを選び、決して見捨てない」とあるように。それゆえに「僕」でありながら「わたしの愛する友」と私たちを呼び、「わたしは捨てない、共にいる」「恐れるな、たじろぐな」と励まし続けてくださるのです。ヨハネ福音書 15 章の主イエスも同じです。主イエスは弟子たちを「友」と呼び、「あなたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが行って実を結び、その実がいつまでも残るようにと…あなたがたを任命したのだ。互いに愛し合いなさい、これがわたしの命令である」と語りかけられました。弟子たちは「互いに愛し合う」という使命には不十分で欠けの多い者でしたが、十字架でその弟子たちの汚れた足を洗ってくださる主イエスが共に歩むと、励ましてくださったのでした。

また今朝、共に覚えたいのは 10 節「救いの右の手」という言葉の意味です。「右に出るものがない」とか「右腕」というように「右」には「優れた力」「信頼」「祝福」という意味があります。聖書では父親が子どもを祝福するときには「右手」を置きます。また神が敵を追い払うのも「右の手」です。そして王の「右の座」は「祝福」と「栄誉」を意味しました。ですから主イエスの「最後の審判」のたとえ話（マタイ 25 章）では、羊たちは「右」に分けられて祝福を受け、「左」に分けられた山羊たちは厳しい叱責を受けるものとして描かれます。私たちを愛し、祝福し、守る神さまの力。それは「右手」を通してもたらされるのです。

ただ、今回、聖書における「右」の意味するところを調べて興味深く思ったのは「私たちの右手をおおう陰」「私たちの右にいてくださる神」という表現もよく出てくるということです。その場合、私たち人間の「右手」は「救いを必要とし、救いをつかむための手」として描かれているのです。つまり私たちの「右手」は「力」を象徴するだけでなく、同時に「弱さ」をも象徴しているのです。その「救いを必要とする弱き右手」を支えるために主なる神さまは、私たちの「右」に居てくださるのです。

そのように私たち自身の「弱さ」を象徴する、私たちの「右手」をしっかりと握ってくださる神さまの「右手」は、私たちに対する真実の愛と祈りに満ちた「救いの右の手」です。私たちは、その神さまの「救いの右の手」を「必要としない者」ではなく、遠慮なく手を伸ばして神さまの「救いの右の手」をしっかりと握って歩みたいのです。ペトロは、嵐の湖の上で主イエスに目を注いでいる間は大丈夫でしたが、主イエスから目をそらした途端に嵐の湖の中にあえなく沈んでしまう、「信仰の薄い者」でした。けれども、そのペトロの手をぐいっと握り、再び湖の上に立ててくださる主イエスの「救いの右の手」によってペトロは立ち上がらされていったのです。今週のそれぞれの歩みが「主の救いの右の手」に支えられたものとなりますように、祈ります。